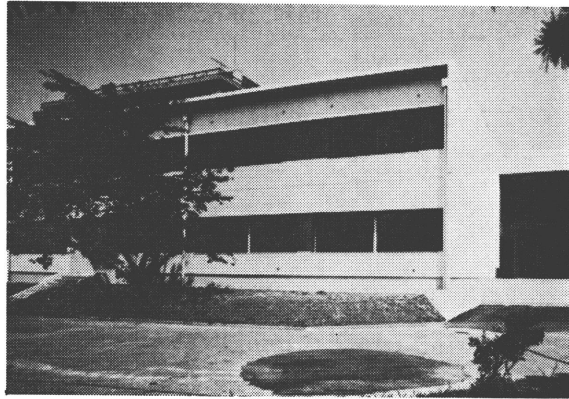




第17章

学 生 部

第1節 学生部の歩み

1. 沿革、機構

昭和24年5月、千葉大学の設置に伴い、厚生補導の組織として教務厚生部がおかれ、長谷川修一（千葉医科大学学生主事）が教務厚生部長に任命され、医学部構内の建物で事務を開始した。

教務厚生部には、教務課がおかれ、教務課長藤井為六（東京工業大学教官）が任命され、教務係、補導係、厚生係、保健係と総務係の5係がおかれた。

厚生補導とはどのようなもので、新しい大学教育にどう位置付けられるのか一抹の不安と定説のないままに、アルバイト、就職、下宿の斡旋を行うことはもちろん課外活動、福利厚生、保健指導のほか各学部、分校間の連絡等に全力をそそいだ。

昭和25年4月、厚生課長三島善鎧（教官併任）が任命され、教務厚生部を文理学部構内に移転した。同年9月、長谷川教務厚生部長の東京大学転出により、柏木嵩（教育学部教授）が教務厚生部長に任命された。

昭和26年1月、学生課長大島藤三（北海道大学厚生補導課長）が任命された。同年12月、教務係を全学係と改称し、また文理学部の一般教養課程の教務関係事務を担当

第1節 学生部の歩み

させる文理係が教務、学生の両課にそれぞれおかれ、庶務係(翌27年、教務課に移管)がおかれた。

昭和27年10月、教務厚生部を学生部と改称し、学生部の事務組織は、教務課(全学係、文理係、庶務係)、学生課(全学係、文理係)及び厚生課(厚生係、保健係)の3課7係となった。翌28年、教務課の全学係を改称して、教務係を復活、文理係を一般教育係に、学生課の全学係は課外活動係に、文理係は学生相談係にそれぞれ改称したが、その後39年までこの事務組織に変動はなかった。

学生部が厚生補導の充実を期するためには、これを補佐し、協力する学内組織が必要である。本学では、教務厚生部設置以来、検討を重ねた後、昭和28年7月「千葉大学補導委員会規程」を制定し、学長を議長として各学部から教授1名が、文理学部、教育学部からは教授1名のほか、厚生委員長と分校主事が加わって組織される補導委員会が発足した。

昭和35年4月、本学に留学生課程が設置され、翌36年、学生部に次長制が新設され、栗原一郎(文部省大学学術局専門職員)が任命された。また、外国人留学生の留学生課程寮が建設され、寮務事務が増大したため、37年、留学生課程寮務主事室(寮務係と寮生係)がおかれた。

昭和39年3月、柏木学生部長の退官に伴い、学生部長選考規則が必要となり「千葉大学学生部長選考基準」が制定された。その結果、小林龍男(医学部教授)が3代目学生部長に選任された。同年4月、留学生課程が留学生部に昇格した。同年4月、「千葉大学厚生補導委員会規程」を制定し、学生部長を議長とし、各学部、教養部から各3名(ただし、うち1名は厚生補導関係委員会の長とする。)をもって組織する厚生補導委員会が新しく発足した。なお、この委員会は厚生補導に関する基本的事項、全学共通の事項を審議するほか、下部組織として課外活動部会、学寮部会、福利厚生部会の3部会をもち、分担して審議に当ることになった。

昭和42年4月、栗原学生部次長の転出により、賀茂真杜(茨城大学学生部次長)が次長に任命された。いわゆる学園紛争のため、44年5月、一部学生により本部(事務局、学生部)の建物が封鎖され、その後、教養部6号館が封鎖されたが、同年9月、教養部6号館の封鎖を教職員、体育会学生により解除し、同年12月、本部職員が中心となって本部の建物の封鎖を解除した。

昭和46年4月、賀茂学生部次長の転出により、佐々木祐三(信州大学学生部次長)が次長に任命された。また厚生課に留学生寮係がおかれ、厚生課は厚生係、保健係と留学生寮係の3係となった。

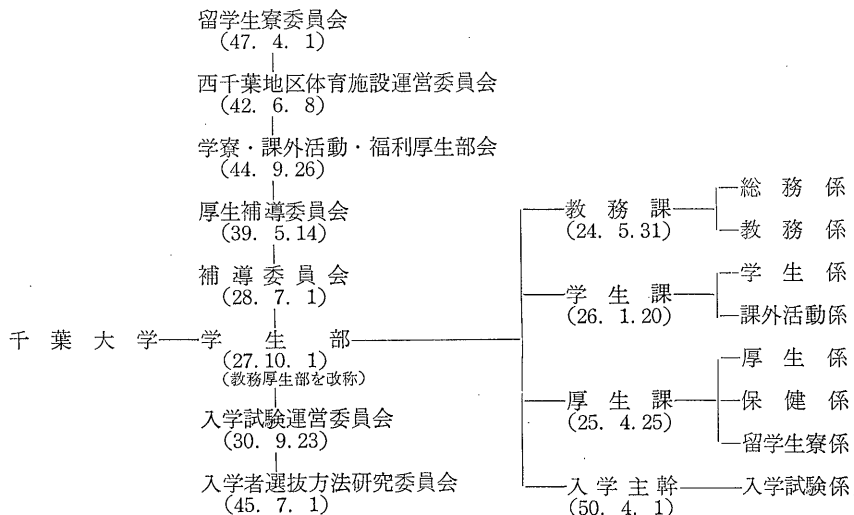
昭和48年4月、佐々木学生部次長の転出により、浪貝一良(青森県教育委員会次長)が次長に任命された。

昭和49年4月、教務課の庶務係を総務係、学生課の学生相談係を学生係に改称し、教務課(総務係、教務係)、学生課(課外活動係、学生係)及び厚生課(厚生係、保健係、留学生寮係)となった。

昭和50年4月、浪貝学生部次長の転出により、近藤純一(岐阜大学庶務部長)が次長に任命された。また同年4月、入学主幹が設置され、学生部長、次長ならびに3課、1主幹、8係、職員39名(非常勤10名を含む)の組織となって現在に至っている。なお、現在の学生部の組織は次図のとおりである。

学 生 部 組 織 図

(昭和54年3月現在)



2. 入学試験制度

大学入学試験の実情は、大学進学希望者のいちじるしい増加、学歴偏重、有名大学偏重等の社会的風潮を背景として激しい入学競争の様相を呈してきた。

多数の志願者を限られた期間内に選抜する必要上、いわゆる〇×方式、多岐選択、難問奇問が出題される傾向が目立ってきた。これら従来の入試制度の諸問題の解決は、教育関係者の長年の懸案であったわけである。

昭和54年度の国公立大学入学者選抜のための共通第一次学力試験は、大学入試制度

第1節 学生部の歩み

としては空前の大改革であると言える。しかしながら入試改革はすでに戦後早々から検討実行されてきたことがらであった。

最初の試みは、「進学適性検査」であった。米国教育使節団の勧告で「大学進学に対する素質・能力の適性を科学的に検出する」ために、昭和22年から29年までの8年間行われた。この制度は大学側の積極的な協力・利用がなくかえって受験準備を激化して、受験生に二重の負担を強いるという批判が高まり廃止された。

次が「能研テスト」であった。中央教育審議会の答申を受けて文部省は、財団法人能力開発研究所を設立し、大学入学者の選抜と高校の進路指導等に役立てるため、昭和38年から共通の学力テスト、進学適性テスト、職業適性テストを作って実施した。しかしこれには、日教組等外部から体制側の人材選別政策であるという批判が出て、大学側も消極的になり結局、昭和43年には中止に追い込まれた。

入試制度の改革としては、共通一次学力試験は3度目といえる。大学紛争の終期近く昭和44年、45年頃から大学入試や高校の受験体制に問題があるとする反省が教育関係者の間から強く出されていた。中央教育審議会は①調査書の重視②共通のテスト③各大学での自主的試験のバランスのとれた選抜をするよう強調した。国立大学協会も関心を示し、東大その他意見交換をはじめた。

文部省はこれらのタイミングをとらえて国大協に対し共通テストの検討を要請したのであるが、これを受けて昭和45年11月国大協総会において、「共通テスト実施の可否」を検討することとなった。その後国大協では入試調査特別委員会を作る等検討に検討を重ね、昭和51年11月の総会で54年度の入試から実施可能との結論を出したのである。公立大学協会もこの共通一次に合流する態度を決めた。

文部省は、昭和52年5月設置法の改正により共通一次の実施、研究の2部門を置く大学入試センター（東京駒場の旧教育大学の校舎の一部に）を設置した。一期校、二期校の一元化を渋っていた文部省は、この共通一次の実施にからめて解消することとなった。実に7年有余の年月を経て昭和52年7月文部省は、昭和54年度以降における大学入学者選抜実施要項を公表し、実施されるはこびになった。

従来の制度の概要、入学試験の方法を改め（コンピューター利用によるマークシート方式の採用）、全国的に共通した適切な試験問題を課することにより、高等学校における一般的学习の達成度を客観的に評価する共通第一次学力試験と、この趣旨に対応しつつ各大学が自主的に学部・学科の特性に応じて重視される能力と適性を検査する第二次試験とを組合せる方式により、これらの成績と大学が必要に応じ実施する、面接、小論文等の結果及び調査書等を合理的に総合して、入学者の能力と適性を判定

することとなった。このときの通知では、試験日は昭和53年12月23日、24日、願書受付は9月1日からと決められていたが、その後高等学校側から、共通一次は現場の実情を無視している。学校行事を阻害し、受験を一層過熱させる等不満や批判が出たので、文部省は事態を重くみて、試験日の繰り下げについて検討を加え、 possible の判断をして、願書の受付けを10月2日から16日までとし、試験日を昭和54年1月13日、14日に繰り下げることを決定した。このようにして共通一次試験は今後の実施上の諸問題を含みながら背水の陣を布いてスタートすることとなった。

大学入試センターでは、当初志願者予想数を全国で450,000名前後と胸算用していた。従って千葉大学における受験者数も15,000名～20,000名前後を予想した。ところが10月16日の締切り以後まとまった志願者数は全国で341,835名であった。千葉大学での受験者数は8,870名で（この数は全国で9位である）、試験場も当初予定していた公立高校等を借用しなくてすむことになり、西千葉地区5試験場と松戸地区園芸学部試験場の2試験場で実施した。

昭和47年度から文部省は、国立数大学に、毎年、入学主幹を設置してきたが、本学においても、昭和50年4月入学主幹が設置された。

入学主幹は、学内の入学試験業務の総括を行いあわせて、入試制度の改善に関する学内の調整をはかるとともに、文部省及び大学入試センターとの行政事務連絡業務を行っている。

入学主幹が新設された昭和50年4月以降の主な行事は次のようなものである。

昭和50年4月1日に千葉大学学生部に入学主幹が設置され、同年4月26日、27日の2日間、昭和50年度新設の看護学部の入学者選抜試験を実施した。同年11月全国の高校生約5,000名を対象として共通一次学力試験試行テストが実施され、本学においては、教官、事務官十数名が東京大学の実施会場に監督者として参加した。

昭和51年3月3日、4日の2日間、昭和51年度千葉大学入学者選抜試験を実施した。同年4月13日、14日の2日間、千葉大学工業短期大学部を改組して新たに設けられた工学部特設工学課程の入学者選抜試験を実施した。同年10月10日、11日の2日間、全国の高校生約10,000名を対象として、共通一次学力試験試行テストが実施され、本学においても千葉県下の高校生300名を対象として実施した。

昭和52年3月3日、4日の2日間、昭和52年度千葉大学入学者選抜試験を実施した。同年12月24日、25日の2日間、全国の高校生約63,000名を対象として、共通一次学力試験試行テストが実施され、本学では千葉県下の高校生1,760名を対象として実施した。

第1節 学生部の歩み

昭和53年3月3日、4日の2日間、昭和53年度千葉大学入学者選抜試験を実施した。

3. 公開講座の実施状況

本学における公開講座は、大学を地域社会に開放する事業の一環として昭和47年度に開設された。当初は「開放講座」の名称で行われ、所管は事務局庶務課であった。昭和49年度から名称を「公開講座」と改称し、学生部教務課の所管となった。

開設以来、6回の公開講座が実施されているが、昭和47・48年度は、そのテーマが社会問題とされている公害に関するものであったため、各企業団体や官庁関係者の受講者が多かった。

昭和49年度以降は、講座のテーマが生活に密着したものとなったためか、女性、特に主婦層の受講が多くなってきている。また、昭和53年度からは、従来の連続5日間の集中講義方式を改め、毎週土曜日の午後に開設する方法になっている。

本講座に対する地域住民各層の関心と期待は大きく、回を重ねるに従って受講希望者が募集人員を大幅に上廻る状況である。

なお、開設した講座内容を年度別に掲げると表17-4のとおりである。

公開講座の実施状況は以上のとおりであるが、大学開放のもう一つの施策としてスポーツ教室がある。

近年における社会環境、生活環境の急激な変化の下において、国民一般の生活における体育、スポーツの必要性及び欲求が高まってきており、各地において住民のためのスポーツ教室の開設普及が計られてきている。

本学においても、このような現状にかんがみ、昭和48年度から毎年度青少年を始め、地域住民のためスポーツ教室を開設している。

昭和48年度から51年度までは、文部省体育局長からの委嘱によって実施されていたが、昭和51年度からは公開講座の一環として実施されている。



公開講座講義風景

なお、昭和48年度以降のスポーツ教室の開設状況は表17-1のとおりである。

表17-1 スポーツ教室の開設状況

年 度	コ ー ス 名	開 設 期 日	対 象 者	募集人員
48	バレーボール	8月9日～12日 8月17日～19日	家庭の主婦	30
	水 泳		家庭の主婦	30
49	バスケット	8月13日～22日	小学校3年以上の男女	30
	体操(健康と体力づくり)	8月7日～16日	家庭の主婦	30
	パトミントン	8月9日～12日、8月20日～22日	家庭の主婦	30
50	なわとび	8月20日～25日、9月～11月までの毎週日曜日	千葉市内在住の主婦	30
	親子水泳教室	8月20日～27日	千葉市近辺の主婦と小学生以上の児童	30
51	水 泳	8月11日～17日	小学生男女	30
	ミニバスケット	8月14日～18日、8月23日～27日	小学校4年以上の男女	30
	フォークダンス・民踊	9月5日～10月24日までの毎週日曜日	一般男女	30
52	水 泳	8月12日～18日	小学生男女	60
	テニス教室(硬式)	11月13日～12月18日までの毎週日曜日	女 性	30
53	剣道教室	8月4日～10日	小学校3年～中学校3年	30
	硬式テニス教室	8月7日～13日	家庭婦人	30
	水泳教室	8月17日～23日	小学校3年～6年	30
54	剣道教室	8月3日～6日、8月10日～12日	小、中、高、一般	30
	テニス教室(硬式)	8月10日～16日	家庭婦人	30
	水泳教室	8月18日～24日	小学校3年～6年	30

第2節 課 外 活 動

1. 大学歌、学旗の制定

昭和34年、創立10周年を迎えたことを機に、大学歌、学旗制定の議が起こり、創立10周年記念会においてその予備調査が進められた。同年4月、制定のための委員会が設けられた。

数次にわたる審議の末、制定委員会は、大学歌については、作詞者として勝承夫氏

千 葉 大 学 歌

勝 承 夫 作詞
平 井 康三郎 作曲

(一)

若い空 若い地

房総の 風は歌うよ

太洋の意気 寄せ来るところ

内海の和気ただようところ

みよ 青春の 花のよろこび

千葉大学 心のふるさと

(二)

晴れわたる 満ちわたる

新鮮な 汐の香りよ

向学の窓 清らに高く

探究の庭 はてなく 広く

みよ 燦然と叡智あつまる

千葉大学 文化のさきがけ

(三)

若い雲 若い鳥

黎明の 星は光るよ

躍進の道 はるかにひらけ

純情の友 楽しく競う

みよ 永遠の聖火燃えたつ

千葉大学 栄あるまなびや

千葉大学歌

生氣はつらつと(♩=約108)

阿部 夫 作詞
平井 康三郎 作曲

1. わ か れ い そ ら わ か い つ ち ほ う そ う の
2. は は い わ た く も み ち だ り し れ い せ い な
3. わ か い く も わ か い と り し れ い せ い な

か ぜ は う た う ー よ ー たいようのいき
し お の か お り ー よ ー こくうのまどち
は し は ひ か る ー よ ー や く し ん の み

よ き せ ぐ る と こ ろ なた い か い の の わ に た は だ て う と ち ろ
は せ ゃ る か に た ひ ら け じ ゅ ん じ ゅ の の た と の な く ひ き

ろ く ー み よ ー せ い し ん の と
く ー ー み よ ー せ い し ん の と

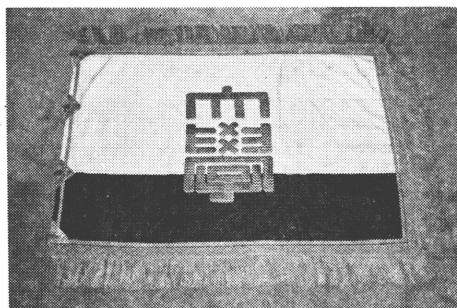
は え せ ない の ち か も ろ つ え ー び る ー ち ち ば ば だ だ い が
は せ ない の ち か も ろ つ え ー び る ー ち ち ば ば だ だ い が

く ー ー こ は ー こん え ー ち か あ の の る ー よ さ ま ー さ が び ー け や ー ー

第2節 課外活動

作曲者として平井康三郎氏に委嘱を決定、また学旗のデザインについては、工学部山崎幸雄教授に協力方を要請した。

昭和35年1月、勝承夫氏、平井康三郎氏による大学歌の楽譜が出来上り公開された。また学旗も、山崎教授の手を経て、白木屋に製作が委託され、同年2



学 旗

月に出来上った。2月の評議会は、これらの大学歌、学旗を正式に制定した。

なお、学旗の制定に際して、制定委員会においては、学旗の威厳、重厚性を尊重することになり、昭和24年10月すでに制定されていた千葉大学バッジの色彩を採用し、ガーネット（暗紅色）は情熱を、ホワイト（白色）は純粋さを表現するものとして染分けられ、ガーネット5、ホワイト9の比率となっている。

また、昭和35年9月、大学歌の管弦楽伴奏楽譜が、寺内昭講師の作曲により完成した。

2. 西千葉地区の課外活動施設

文理学部の小中台地区から西千葉地区への移転は昭和38年であるが、当時体育施設としては、同年に整備された陸上競技場、サッカー場、野球場等は存在していたが、体育館、武道場は未だなく、東京大学生産技術研究所から所属替えとなった古い木造建物を応急の屋内施設に充てていた。

以下西千葉地区に整備された体育施設をみると、表17-2のとおりである。

表17-2 西千葉地区体育施設

施 設	設置年度	内 容
陸 上 競 技 場	38	13,786m ²
サ ッ カ ー 場	38	12,000
テ ニ ス コ ー ト	38	6 面
バ レ ー コ ー ト	38	4 面

野 球 場	38		18,500m ²
第 3 合 同 部 室	39	プ レ ハ ブ	99
プ ー ル	39	9 コ ー ス	25m
体 育 館	42	鉄筋コンクリート造2階建	2,583m ²
自 動 車 部 車 庫	43	プレハブ平屋建	124
武 道 場	47	鉄筋コンクリート造平屋建	976
弓 道 場	49	鉄骨造平屋建 8人立	112
音 楽 共 同 練 習 A 棟	51	ブロック造平屋建	100
B 棟	51	鉄筋コンクリート造平屋建	100
体 育 管 理 合 宿 施 設	52	鉄骨造2階建	119

以上のほか、昭和52年には、江戸川にボート艇庫（鉄骨造平家建195m²）が建設された。このように逐次整備をみているが、一方、課外活動団体（サークル）の部室の現状は問題点を多く抱えている。部室は現在いずれも木造危険建物である第1、第2合同部室および卓球場・合宿所の3棟が主体であり、いずれ何らかの処置を講じなければならない段階に来ている。

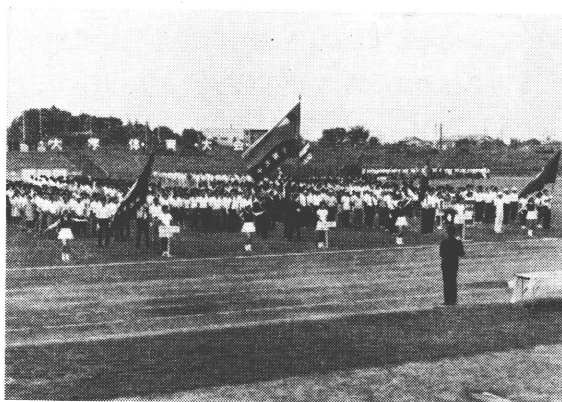
体育会の創設

昭和49年10月、運動系サークル協議会の長田委員長（剣道部）を中心としたグループから、成文化した規約のもとに組織された体育会を設立しようとする話が持ち上がった。そして準備委員会のもとで半年にわたって規約案が検討された。この規約案が正式に代表者会議を通過するまでさらに10か月を要した。昭和51年2月、千葉大学体育会は発足した。

関東甲信越地区大学体育大会

体育系サークルが数多く参加する夏の主要行事としてこの大会がある。

昭和27年、茨城大学の当番で始まったこの大会に、千葉大学は毎回参加し、昭和53年には第27回を迎えた。この間、千葉大学は、第5回（昭和31年）、第14回（40年）、第24回（50年）に



第22回関東甲信越地区大学体育大会(昭和48年新潟大学)

第2節 課外活動

それぞれ当番大学を引受け、千葉市を中心に県下の施設を使ってこの大会を開催した。

3. 学生自治会

昭和24年5月、新制千葉大学は5学部をもって発足したが、当初は自治組織はおろか1サークルもなかったが、次々文芸部、社会科学研究会等のサークルが結成され、また全学統一組織を要望する声が学生間にあった。

その頃、全学連（全国学生自治会総連合）が結成された。

9月には、大学は学生の要望に対処するため、学生の組織作成にとりかかった。先ず規約起草委員を各学部学生の中から任命した。起草委員会は規約草案を作り、学生大会召集の告示の後、第1回学生大会が行われた。

大会では、学生から「草案に、構成は全学組織となっているが、まだ出来ていない専門課程各学部の自治会をしぼるのは不当である。四街道(教育学部分校)、松戸(工、園)など遠隔地と一緒に単一組織を作れば、委員会の成立も困難だし、機動性も失われる。それより先ず一般教養学生の自治会を作るべきである」との意見が出された。そして名称を学生会にし、自治会としないのはなぜかとの質問に「自治会という名称は不適當」と大学側「我々は自治権が欲しい」と学生側との対立となったが遂に「この草案を否決し、一般教養学生自治会を急速に結成することを確認する」旨の緊急動議が多数で可決された。

このため、規約草案は学生側で否定される結果となった。学生側では新起草委員の手によって草案がまとめられ、12月の学生大会において、「千葉大学一般教養学生自治会」の発足となった。

しかし自治会活動は一定のワクの外に出ることもないまま全学的なものにならなかった。

昭和27年大学は別の学生組織をつくろうとした。

大学は、学生、大学関係者で構成する学友会結成準備委員会を開き、組織、会則を検討したうえ、その構想を発表した。その内容は、学生、教職員を構成員とする、教官と学生との交流、学生相互の親睦をはかる組織を意図したものであつた。しかし、学生の中からその構想に批判が起こり、学友会反対運動、自治会再建運動に移っていった。

自治会再建運動準備会の主導で、クラス代表、厚生委員会、学生課の3者構成の協

議会が設けられ、全学自治会結成への模索が続けられたが成功せず、一時運動は停滞した。

その後、学生代表と大学側との度重なる話合いの結果、昭和27年末に、千葉大学稲毛地区学生会が結成された。

昭和33年に至り、学生会執行部は、自治会設立を決議、代議員の承認を経て、全学投票に入り自治会の発足を試みたが、大学は承認せず不成功に終わった。

昭和35年における各学部の自治会活動の状況は次のとおりで、自治会の名称、組織所属サークルの順に列記すると、

1. 文理学部学生会 代議員会
文化部会26サークル 運動部会28サークル
2. 医学部自治会 常任委員会、厚生部、新聞部、文化部16サークル、運動部10サークル
3. 薬学部学友会 委員会、クラス会、部会（文化部、運動部は未設置）
4. 工学部工友会 総務部、クラス部会、文化部会4サークル、運動部会8サークル
5. 園芸学部自治会 学部大会、クラス委員会、クラス大会、連絡会議、文化部6サークル、運動部4サークル
6. 教育学部自治会 学生大会、自治委員会、常任委員会、文化部、運動部
7. 教育学部分校自治会 委員会、文化部5サークル、運動部2サークル
8. 一般教養課程自治会（稲毛地区学生自治会）代議員会、自治委員会、執行委員会、文化部協議会34サークル、運動部協議会22サークル、合同委員会

昭和36年に至り、大学側と学生代議員との話合いを経て、千葉大学教養課程自治会発足の運びとなった。このため、従来の千葉大学稲毛地区学生会は発展的解消をみた。

昭和53年現在の各学部、教養部の自治会と所属サークルの現況をみると、

1. 人文学部（自治会はおかれていない。） 文化部1サークル
2. 教育学部自治会 文化部12サークル
3. 医学部自治会 文化部14サークル 運動系サークル 18サークル
4. 理学部自治会 文化部1サークル
5. 薬学部学友会 文化部4サークル 運動系サークル 3サークル
6. 工学部工友会 文化部3サークル
7. 園芸学部自治会 文化部5サークル 運動系サークル 13サークル

第2節 課外活動

8. 看護学部（自治会はおかれていない。）
9. 教養課程自治会

4. 学生のサークル活動

昭和53年における西千葉地区のサークルは次のとおりである。これは届出がなされ公認されたものである。

文化系サークル（79サークル）

昭和54年3月1日現在

合唱団、管弦楽団、ギター部、軽音楽部、マンドリンクラブ、フォークソング愛好会（ZOO）
ウボイコール、カントリー&ウエスタン研究会、ポップス研究会、ジャズ研究会、TADPOLE
（おたまじゃくし）、カレントフォーク、能楽研究会、竹葉会、道しるべ、農村問題研究会、植
物同好会、自然保護研究会、日本文化研究会、無線研究会、シネマ研究会、放送研究会、写真
部、肖像写真研究会、医用電子工学研究会、原理研究会、U. S. O. 研究会、航空宇宙研究会、
葉法会、星を見る会、映画研究会、ドイツ文化研究会、鉄道研究会、国際経営学研究会、カラ
ー写真をつくる会、電子計算機研究会、企画構成研究会、仏教哲学研究会、唯物論研究会、絵
画同好会、文芸部、E. S. S. 美術研究会、マルクス主義研究会、社会科学研究会、エスベラ
ント研究会、詩の会、読書同好会、第3文明研究会、医療問題研究会、時事問題研究会、自然科
学研究会、法社会学研究会、キリスト者の会、禅の会、演劇部、サイコドラマ研究会、将棋
部、囲碁部、釣部、茶道部、華道部、かるた同好会、マジックサークル、献血クラブ、グラフ
ィックメディアアートクラブ、心理学研究会、ペット愛好会、落語研究会、喰始、旅の会、さ
すらいの会、ガラパゴス、探検部、ユースホステルクラブ、マンガ研究会、S. F. 研究会、T
定規、文化系サークル協議会

体育系サークル（50サークル）

昭和54年3月1日現在

バドミントン部、ハンドボール部、準硬式野球部、硬式野球部、ラグビー部、男子バレー部、
女子バレー部、男子バスケット部、女子バスケット部、サッカー部、卓球部、アメリカンフ
ットボール部、ゴルフ同好会、硬式庭球部、軟式庭球部、卓球同好会、体操部、陸上競技部、剣
道部、空手部、弓道部、柔道部、正道術、合気道部、水泳部、スケート部、スキー部、オリ
エンテーリング部、徒歩旅行部、キャンピングツアークラブ、山岳部、自動車部、ヨット部、漕
艇部、サイクリング部、馬術部、ライフル射撃部、モダンダンス、少林寺拳法部、あるこ
う会、民族舞踊研究会、舞踏研究会、フリスビーーズ、くたびれもうけ、二輪愛好会、サーフ
ィングクラブ、球技研究会、フォーシーズンオブカーライフ、体育会、応援団

5. 学生の遭難事故

課外活動が盛んに行われる反面、不注意に起因するもの、不可抗力によるものの違
いはあっても、遭難事故は跡を絶たない。学業半ばで命をおとした悲しい記録を拾っ

て以下に綴る。

①教育学部、工学部学生の山岳部員2名、昭和32年3月13日白馬岳で雪崩により遭難し行方不明となった。3次にわたる捜索隊派遣ののち、同年5月20、22日にそれぞれ遺体となって発見された。

②昭和33年6月29日、ヨット部夏季合宿のため、千葉港から、ディンギー4隻、スナイプ2隻で勝山に向けて出発、途中天候悪化のため引返しているところ、強風と三角波によりてんぷく、防波堤に打ちつけられた。この事故によって工学部1年生1名が死亡した。

以上、事故続発を憂慮した大学は、予防対策として、父兄を交えた山岳部員、ヨット部員との連絡、懇談を重ねた。

③昭和34年3月10日、教育学部学生2名、谷川岳で登山中、転落死亡した。

④北アルプス後立山で、春山合宿中の山岳部員の医学部学生4名は、昭和45年3月6日、猛吹雪により遭難、1名死亡、他の3名も負傷、凍傷を負った。

⑤昭和49年7月28日未明、新潟県妙高の焼山で大噴火があった。たまたま同地を登山のため訪れていた園芸学部3年生の探検部員2名、徒歩旅行部員1名は、火山弾の直撃にあい全員死亡した。捜索隊の遺体収容作業は、現地が火山活動中で危険な状況であったため難航したが、8月3日に至り終了した。

6. 学 生 運 動

千葉大学発足以来の学生運動を概観するとき、いくつかの峰があり谷がある。これらの起伏は、多くの他の大学と同様に、全学連の中央の取組んだものと密接に連動したことが多いことに気付く。

昭和29年頃から始まった原水爆実験反対の運動、一方では国内政治に向けた教育3法案（新教育委員会法、新教科書法、教育公務員特例法）、国鉄運賃値上げ、勤務評定、警職法改正に対するいずれも反対運動が、昭和34年頃にかけて、千葉大学キャンパスの内外で続けられた。

昭和34年から翌年にかけていわゆる60年安保闘争は、30年代に特記される千葉大学学生運動の断面であった。昭和35年4月から国会請願デモが始まり、学内集会、デモの後で国会へ向かうといった方式が繰返された。大学の告示、説得に拘らず、授業は中止されたりした変則な状況が6月半ば過ぎまで現出した。この間、6月15日の国会デモ中に起きた衝突事件で、千葉大学学生20名が逮捕され5名が負傷した。

第3節 学寮・厚生福利

マレーシアの留学生チュア・スイ・リンの復学問題がおこったのは昭和40年である。

昭和43年から44年にわたる全国の大学を巻きこんだいわゆる大学紛争の嵐に千葉大学も例外ではなかった。

西千葉地区においては、工業短期大学部における自衛官通入学問題、学長選挙問題が、またこれと並行した形で亥鼻地区においては医学部の登録医制度をめぐる同教授会と医学部自治会との葛藤が昭和44年12月まで続いた。

昭和49年、公害問題をとりあげた運動が2月から4月にかけて続けられた。また、同年5月、大学管理法案に反対する集会在、学内外で行われた。それと並行して、M P I（モーブレイ性格検査）一学生相談に反対する運動がとりあげられ、M P I 粉碎、反公害、部落解放、防衛医大解体の運動が相互に関連するものとして学生運動のテーマとなった。

その後、昭和50年から翌51年にかけて国立大学学費値上げ阻止に向けての運動があった。

以上、千葉大学の学生運動の骨子をのべるにとどめ、詳細については、総編の記述に譲る。

第3節 学寮・厚生福利

1. 学 寮

(1) 新制大学発足当初の学寮

旧制諸学校が保有していた学寮を引き継いだもので、その多くは旧軍隊の木造兵舎を転用した老朽施設であった。昭和26年4月1日千葉大学学寮規程が制定され、学寮は各学部置くことができる、学寮の主管は当該学部長があたるとし、学部長の委嘱した顧問が学寮生活に対し随時適切な助言をすることとなっていた（昭和39.6.27現行学寮規程の制定に伴い廃止）。当時の学寮は次のとおりである。

教育学部	猪 丘 寮	男 子	110名
教育学部分校	拓 心 寮	男 子	192名
同	上 睦 寮	女 子	114名

医 学 部 研 水 寮	男 子	18名
同 上 人 生 希 望 寮	男 子	47名
同 上 第 一 学 生 寮	男 子	25名
工 学 部 松 芸 寮	男 子	68名
園 芸 学 部 浩 気 寮	男 子	80名

昭和25年当時、寮生が負担する経費は学寮により多少の差はあったが、月額にして、寄宿料100円、寮費（共同費用に充てる）40円～100円、食費1,100円～1,200円程度、他に入寮費200円を入寮の際納入した。



人生希望寮外景

(2) 拓心寮の焼失と啓心寮の開寮

昭和27年3月26日拓心寮を焼失、この代替として教育学部分校職業科教育棟のうち、10教室3研究室を転用して36名収容の寮とし啓心寮と命名、同年4月開寮した。

(3) 文理学部男子寮開寮

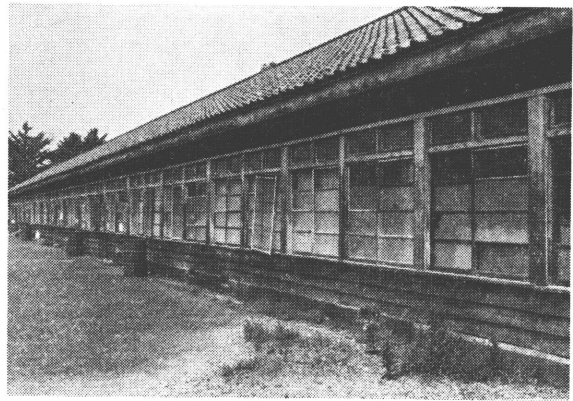
文理学部北方500mに位置した一般教養体育実技の卓球、ダンス場（旧陸軍防空学校幹部候補生生徒集会所及び酒保・W2 3,010.6m²）の2階を3名部屋16.5m²10室、2名部屋9.9m²1室に改修、32名収容の学寮として昭和27年11月1日小池敬事文理学部長、柏木嵩学生部長、吉川孔敏厚生課長、山崎寛一文理学部事務長等関係者出席のもとに開寮式を挙行、北寮と命名した。食事は構内の学生食堂を利用した。なお、拓心寮焼失で罹災した文理学部学生の住対策のため北寮開寮までの応急措置として、同年4月ごろ同キャンパス内の附属図書館書庫（旧陸軍防空学校照空及び予習講堂、R I 127.99m²）に24名を収容、短期間ではあるが薦寮（建物外壁に薦が張っていた）と称し利用された。北寮は昭和40年4月稲毛寮A棟完成に伴い廃寮となる。

(4) 無 名 寮

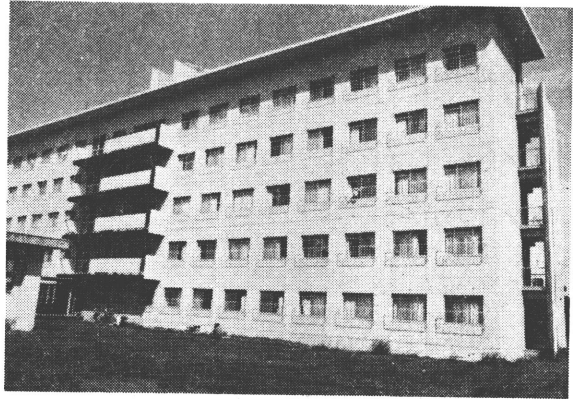
一般教養課程学生の住居問題は前々から深刻なものであったが、当時の吉川厚生課長、伊藤信一厚生係長の努力により昭和30年4月念願の男子寮を開寮、無名寮と命名した。

第3節 学寮・厚生福利

無名寮は、旧陸軍習志野学校車廠2棟のうち1棟600m²を昭和29、30両年度にわたり4,096,550円を要して改造、3名部屋16.5m²16室、2名部屋13.5m²1室計50名を収容同30年に開寮、残り1棟609m²について年次計画で改修昭和34年に53名収容で開寮、前者を第一無名寮、後者を第二無名寮と称した。食事については当初隣接の人生希望寮から主食（1食15円）だけを受け、副食は市販の物を各自の好みで1食20～40円で購入していた。昭和34年4月第二無名寮開寮を機に財団法人学校福祉協会（以下「福祉協会」という）に食堂業務を委託、同36年4月から寮生の自主運営、同44年4月から大学の管理するところとなる。この間、昭和35年9月19



旧無名寮外景



現在の新無名寮外景

日に53名（中3名疑似）の集団赤痢、同48年9月11日には27名の食中毒が発生、施設の老朽化が問題となった。同51年9月千葉市小中台町に新寮が完成したことにより廃寮となったが、同年11月30日夜半不審火により1棟を焼失した。

(5) 留学生寮

昭和35年4月留学生課程が新設、翌年6月留学生寮A棟が開設され学生部が所管していたが、同39年4月留学生部へ移管、同46年4月留学生部の廃止に伴い再び学生部が所管する。同48年度からは東京地区国立大学在籍の外国人留学生も受け入れることになった。

(6) 利用状況

以上のとおり設備、収容能力ともに貧弱なもので、特に女子寮は陸寮だけで入寮は困難であった。昭和32年には、男子寮である人生希望寮に7名の女子学生が強行入寮

表17-3 学 寮 の 現 況

所 属	寮 名		入 寮 対 象 者	収容定員	施 設 の 概 況				所 在 地	概 要
					構 造	面積 _{m²}	建築年月	1 室 の 収容人員		
学 生 部	無 名 寮		教養課程 男 子	名 100	R 5	381 1,800	昭和 51.7	1～2	千葉市小中台町824	
	稲毛寮	A 棟	専門課程	88	R 4	1,654	40.3	2		猪丘寮代替としてB棟完成に伴い、工学部所管のA棟を統合して学生部所管となる。
		B 棟	男 子	120	R 4	3,439	41.3	2		
	睦 寮		全学女子	118	R 4	1,049 1,890	39.3	2		
医 学 部	医 学 部 学 生 寄 宿 舎		医 学 部 専門課程 男 子	60	P C 3	359 1,093	54.2	1	千葉市亥鼻1-8-1	第1学生寮(20名収容) 人生希望寮(54名収容) 共に木造老朽寮のため建替えたもの。
園 芸 学 部	浩 気 寮		園芸学部 男・女	男 84 女 26	R 3	892 2,019	46.5	男 4 女 2	松戸市松戸648	
学 生 部	留 学 寮	A 棟	外 国 人	男 139	R 3	1,259 2,519	36.6	1	千葉市小中台町824	東京地区国立大学の外国人学生も含む。
		B 棟	留 学 生	女 30	R 3 一部R 2	629 1,656	38.3	1		

第3節 学寮・厚生福利

するというハブニングもあったが、本学における統合整備計画の進展に伴い、学寮も医学部及び園芸学部所管を除き稲毛地区に統合、これに即応した学寮規程が昭和39年6月27日制定され、同年5月14日制定の厚生補導委員会規程で学寮部会が置かれ、学寮問題に関する事項を審議する全学組織が確立した。現在置かれている学寮は表17-3のとおりである。

稲毛寮、陸寮の食堂運営については、昭和39年4月陸寮が、同40年4月稲毛寮A棟がそれぞれ開寮した時から福祉協会に委託していたが、稲毛寮B棟開寮の同41年4月から、稲毛寮厨房において陸寮分と一括調理方式をとり陸寮食堂に運搬していた。その後寮生側から福祉協会排斥の動きがあがる一方、福祉協会も赤字経営のため辞退の申出があり、同49年3月24日をもって食堂を閉鎖した。この問題を打開するため学寮部会正・副部会長、学生部長、同次長、厚生課長、厚生係長及び稲毛、陸両寮の寮長等役員を交えて寮食堂運営協議会をもち、同年11月1日大学管理のもとに稲毛寮において従来の両寮一括方式で再開した。

2. 厚生施設

教務厚生部が文理学部構内に移転した昭和25年当時の厚生施設は学生ホールのみで、この一隅に書籍販売店（現北田書店）、文房具店（現大和屋）、万年筆店、パン牛乳等軽食販売店を置き各業者に業務委託をしていた。同27年6月新たに理髪業者（調髪60円、丸刈50円等市価の半額）を置いた。同28年文理学部1、2号館南側の既設建物で業者委託による食堂開設したが、同地区留守業務部の移転、丸善石油の進出等に関連して厚生施設の移転も再三にわたって行われた。昭和32年10月から福祉協会に食堂経営を委託した。昭和38年8月西千葉地区に移転統合したがメーン食堂は旧東大施設の教職員食堂で福祉協会が経営、第2食堂（めん類）は業者委託で経営されたが、運営については文部省共済組合千葉大学支部が当たった。昭和41年に現在の厚生施設（R2 1,612m²）が完成し、1階食堂ホール（608席）は厚生課の所管となった。

現在の厚生施設には福祉協会による食堂のほか、軽食品等物品販売所、文房具販売所、書籍販売所、理容室があり、従来どおりの形式で運営されている。昭和49年には西千葉地区学生食堂（R2 1,199m²）が新築され厚生課が所管しているが、千葉大学生活協同組合（昭和40.7.28設立学校認可。昭和44.3.12千葉県知事認可）による食堂（384席）、喫茶部（60席）、書籍、文具、食品等の販売所がある。

3. 奨 学 ・ 援 護

(1) 奨 学 生 制 度

新制大学発足当初の奨学金制度は日本育英会のみで、一般奨学生、教育奨学生、特別奨学生の3種類があった。一般奨学生は貸与月額1,800円、採用期間は一般教養の2か年、専門課程進学時は再申請する。教育奨学生は甲種500円、乙種1,800円の2種類、貸与期間は第2年を修了するまで、第3年以上は一般奨学生として再申請する。特別奨学生は月額3,000円、特に学術研究に適する優秀な者が内職をしないで修学に専念できるよう一般奨学生より高額を貸与するもので、原則として2年次以上の学生を対象とした（当時の自宅外通学大学生生活費月額3,857円）。以後奨学生種類の改廃や貸与額の改訂があり、昭和53年度には学部学生の一般貸与15,000円、特別貸与17,000円（自宅）、23,000円（自宅外）、大学院修士43,000円、博士54,000円となっている。奨学金交付方法は、当初は窓口で職員が担当していた。昭和28年からは銀行員が出張して交付してきたが、昭和53年4月から日本育英会の奨学事務が機械処理に改善されて銀行口座振込方式となった。昭和28年頃から地方自治体等の奨学制度も生れたが、現在は民間団体も合わせて26団体、月額5,000円～25,000円となっている。

(2) 入 学 料 及 び 授 業 料 の 免 除

入学料の免除制度は、昭和50年度から実施されたが過去4か年の実施状況は次のとおり。

区 分 \ 年 度	50	51	52	53
出 願 者 数	30	29	16	61
全 額 免 除 者 数	10	13	9	12
半 額 免 除 者 数	8	5	2	4

授業料減免制度は昭和27年度から実施されたもので、当初の免除範囲は授業料収入予定額の5%に相当する額であった。その後4.75%となり、昭和51年度には新入学者のみ後期から6%、昭和52年度には51年度以降入学者から7%、昭和53年度からは51年度以降入学者について8%と、それぞれ免除範囲が拡大されてきた。また、新入学者については従来原則として免除できなかったが、昭和53年度から在学者同様に取扱われることになった。

(3) ア ル バ イ ト

第3節 学寮・厚生福利

昭和25年当時から教務厚生部内に職業安定法第33条の2の規定に基づき、無料職業紹介所を設けて、アルバイトの斡旋をしていた。アルバイト希望者は421名49.6%で、実就業者数は1か月延人員平均300名あった。職種は軽労働が最も多く、事務、技術の順となっていた。昭和27年当時の調査によると、売血していた者もあった。また、月収の平均的なものは301円～1,000円で49%となっており、希望収入額は500円(25%)、1,000円(20.6)%であった。現在は家庭教師月収23,000円、その他の職種は時給が多く、平均して事務系400円、販売員500円程度である。なお、本学学生グループで襖張りをしているが、市価の半値の1枚800円～1,400円で、利用者の好評を受けている。このグループは、昭和27年、当時の吉川孔敏厚生課長が2～3名の学生に手ほどきしたものが大きく育ち現在に至っている。

(4) 学生健康保険組合

昭和29年4月設立、組合費年額500円、給付は歯科治療を除き50%（年最高限度額10,000円）弔慰金1,000円であった。また、初年度の利用率は9.7%、105件であった。組合費は昭和43年度年額1,000円に改訂され現在まで据置かれているが、給付限度額は昭和31年度に15,000円、昭和35年度には歯科治療も給付の対象となり、昭和39年度に20,000円、昭和43年度30,000円、昭和52年度からは39,000円に、また、弔慰金も昭和43年度2,000円、昭和51年12月から10,000円とそれぞれ改訂された。利用率は昭和47年度に28.1%の高率を示したが、最近の3か年は20%以下である。

(5) 学生教育研究災害傷害保険制度

昭和51年度から発足したこの保険制度は学生の互助共済制度として設けられた全国的規模のもので、学生の正課中における不慮の災害に対する被害者救済を目的としており、本学では入学時に全員一括加入することになっている。なお、この保険の期間は所定の修業年限内で、保険料は、文科系1,150円、医学部、工学部Bコースを除く理工系2,900円、医学部4,050円、工学部Bコース2,350円となっている。

表17-4 千葉大学公開(開放)講座の年度別講座内容

昭和47年度千葉大学開放講座——環境と公害——

7.19	水質汚濁の問題点	薬学部教授	山 根 靖 弘
	海洋汚染と生物	腐敗研究所講師	清 水 潮
	大気汚染の問題点	工学部教授	鈴 木 伸
7.20	大気汚染とぜんそく	医学部教授	吉 田 亮
	有害物質と中毒作用	医学部講師	平 野 英 男
	食品公害と食物連鎖	千葉大学長	相 磯 和 嘉
7.21	農薬汚染の経路	薬学部助教授	宮 崎 元 一
	残留農薬の人体汚染	医学部教授	内 田 昭 夫
	環境汚染と植物被害	園芸学部教授	大 野 正 夫
	汚染指標としての植物の役割	園芸学部助教授	本 多 侔
7.24	生態学から見た環境計画	理学部教授	沼 田 真
	地質学から見た環境計画	教養部教授	近 藤 精 造
	都市の環境計画	園芸学部教授	宮 崎 元 夫
	地域開発計画	教育学部教授	清 水 馨八郎
	—千葉県の地理的性格と環境問題—		
7.25	許容量の概念	千葉大学長	相 磯 和 嘉
	労働環境における許容基準	医学部教授	石 川 清 文
	環境と微生物	腐敗研究所	藤 原 喜久夫
	—自然浄化作用—		
7.26	公害と経済	人文学部教授	前 田 新太郎
	—資本主義発展と思想の変化—		
	公害と法律	人文学部助教授	中 川 良 延
	—私法的救済を中心として—		
	公害と住民運動	教養部教授	中 野 芳 彦
	公害と教育	教育学部講師	水 内 宏

昭和48年度千葉大学開放講座——環境汚染と人間生活——

8.21	安全性ということ	千葉大学長	相 磯 和 嘉
	環境汚染と自然保護	理学部教授	沼 田 真
8.22	重金属汚染の問題	薬学部教授	山 根 靖 弘
	—水銀汚染を中心として—		
	鉄の文化と木の文化	工学部教授	小 原 二 郎
8.23	経済成長と人口	人文学部助教授	佐々木 陽一郎
	食糧問題の将来像	園芸学部教授	鈴 木 忠 和
8.28	失なわれゆくみどり	園芸学部助教授	本 多 侔
	干潟の役割	東京大学助教授	清 水 潮
	前千葉大学助教授		
8.29	自然環境における人間	人文学部教授	白 田 貴 郎
	—人間学の視点から—		
	日本列島再創造	教育学部教授	清 水 馨八郎
	—みどりこそいのち—		
8.30	光化学スモッグ	工学部教授	鈴 木 伸
	大気汚染とガン	医学部教授	香 月 秀 雄
9. 4	大気汚染と健康	医学部教授	吉 田 亮

別 表

難病と奇病	医学部講師	多 田 富 雄
9. 5 ある予測	腐敗研究所教授	宮 木 高 明
—ライフ・サイエンスの視野で—		
くすりの功罪	医学部教授	村 山 智
9. 6 公害と住民運動	教養部教授	中 野 芳 彦
あの殺虫剤の歴史	腐敗研究所教授	久 我 哲 郎
日本人の対人関係	人文学部教授	望 月 衛
—食と性—		

昭和49年度 千葉大学公開講座——生活文化と技術——

8.26 生活文化と科学技術	千葉大学長	相 磯 和 嘉
—過剰なるものを切り捨てるために—		
法律と技術	教育学部教授	土 屋 生
組織と技術	人文学部教授	塩 原 勉
8.27 情報化社会と写真技術	工学部助教授	久 保 走 一
物理学の起源とくらし	理学部教授	玉 木 英 彦
隔測（リモートセンシング）と画像	工学部教授	源 田 秀三郎
新しい教育技術	工学部教授	小 郷 寛
8.28 コンピュータとくらし	工学部助教授	倉 田 是
生活の中のアイディア	工学部教授	田 村 稔
アニメーション文化	工業短期大学部教授	大 江 茂
歴史と技術	工業短期大学部教授	志 茂 主 税
—和時計から現代時計へ—		
8.29 緑と生活	園芸学部教授	福 富 久 夫
環境適応と医学	医学部教授	熊 谷 朗
においと生活	工学部教授	須 賀 恭 一
くらしとデザイン	工学部教授	赤 穴 宏
8.30 印刷技術と生活文化	工学部講師	国 司 龍 郎
染料と生活	工学部教授	飯 田 弘 忠
くらしと錠	工学部教授	波多野 一 郎
住まいをめぐる	工学部教授	小 泉 正太郎

昭和50年度（学内事情により中止）

昭和51年度千葉大学公開講座——「くらし」と「こころ」——

7.26 「くらしとこころ」の講座序論	千葉大学長	相 磯 和 嘉
—くらしのなかの自然と自然のなかのくらし—		
くらしの哲学	教養部助教授	飯 田 亘 之
くらしとからだ	工学部助教授	菊 池 安 行
7.27 くらしととき	工学部教授	志 茂 主 税
くらしと災害	教育学部教授	清 水 馨八郎
くらしと水	工学部土教授	藤 代 光 雄
くらしと団地	工学部教授	小 泉 正太郎
7.28 くらしと色	工学部講師	湊 幸 衛
くらしとあかり	工学部教授	吉 江 清
くらしと装飾	工業短期大学部教授	森 崇
くらしと写真	工学部教授	阪 口 富 弥

第17章 学 生 部

7.29	くらしと印刷	工学部助教授	川 俣 正 一
	すまいと家具	工業短期大学部教授	狩 野 雄 一
	くらしと道具	工学部講師	石 川 弘
	美とくらし	工学部教授	赤 穴 宏
7.30	工芸創作実習		
	写真のできるまで（蒔絵写真の作りかた）	工業短期大学部教授	大 江 茂
	銅版画制作（金属版画の作りかた）	工学部講師	佐 善 明
	木片を加工する（ブローチの製作）	工業短期大学部教授	成 田 寿一郎
	金属板の腐蝕（家紋の製作）	工業短期大学部助教授	高 畑 傳

昭和52年度 千葉大学公開講座「くらしと健康」

7.25	「日々の健康」		
	開講の挨拶	千葉大学長	香 月 秀 雄
	くらしと健康について	医学部教授	萩 原 弥四郎
	生活のリズム	医学部教授	村 山 智
	かびと人間生活（かびとかび毒）	生物活性研究所教授	山 崎 幹 夫
	かびと人間生活（かびによる病気）	生物活性研究所教授	宮 治 誠
	かびと人間生活（かびとガン）	生物活性研究所教授	寺 尾 清
7.26	「母と子の健康」		
	こどもの健康のみかたまもりかた	前医学部教授	久 保 政 次
	母親の健康	医学部教授	高見沢 裕 吉
	加齢と女性（更年期とは）	医学部教授	高見沢 裕 吉
	ワクチンと予防接種	看護学部教授	橋 爪 壮
7.27	「成人の健康Ⅰ」		
	循環と加齢（高血圧、狭心症、心筋梗塞）	医学部教授	稲 垣 義 明
	嗜好品と健康（酒・たばこ・コーヒー）	看護学部教授	石 川 稔 生
	健康体操（実習）	教育学部教授	島 崎 旺
7.28	「成人の健康Ⅱ」		
	胃がんの話	医学部助手	佐 藤 裕 俊
	乳がんの話	医学部講師	武 田 清 一
	応急対策（外傷、脳卒中、てんかん発作）	医学部講師	植 村 研 一
	人工呼吸・止血など（実習）	看護学部助教授	大 塚 寛 子
7.29	「こころとからだの健康」		
	心の健康	医学部教授	佐 藤 孝 三
	重症心身障害児	医学部講師	来 馬 真 一
	小児と整形外科	医学部教授	井 上 駿 一
	老人の家庭看護（実習）	看護学部助教授	大 塚 寛 子

昭和53年度 千葉大学公開講座「くらしと文化を探る」—日本と世界—

5.27	日本の生活と芸能	人文学部教授	井 浦 芳 信
	花神の時代	人文学部教授	宇 野 俊 照
6. 3	現代のモラルと宗教	人文学部教授	白 田 貴 郎
	しつけ		
	—性格の形成—	人文学部助教授	青 木 孝 悦
6.10	大企業と国民のくらし	人文学部教授	清水川 繁 雄
	男女平等	人文学部教授	尾 吹 善 人

別 表

6.17	アメリカの風土と精神	人文学部教授	原 田 敬 一
	勝海舟とヒットラー	人文学部教授	小 島 純 郎
6.24	フランス人の生活の知恵	人文学部教授	島 田 昌 治
	日本社会のタテとヨコ	人文学部教授	中 野 卓
7. 1	新しい性モラルの確立	人文学部教授	江 守 五 夫
	核家族と離婚	人文学部教授	中 川 良 延
7. 8	日本経済の直面する問題	人文学部教授	伊 東 光 晴
	物価はなぜあがる	人文学部教授	伊 東 光 晴
	―日本のインフレーション―	人文学部教授	小 松 憲 治